



学校だより

ひびき

7月号

令和5年6月30日

昭和54年3月3日制定

横浜市立獅子ヶ谷小学校

子どもたちの間で起きること

校長 大塩 啓介

早いもので、もう7月に入り、今月下旬には夏休みに入ります。うかうかしていると、もう今年が終わってしまいそうです。

さて、最近の子どもたちの様子をお伝えします。土曜参観日にご覧いただいたように、各教室では落ち着いた授業の様子が伺えます。授業中の姿勢を意識している児童も多く、私が後ろからそっと教室をのぞき、それに気が付いた児童はなぜか背中が伸びていきます。そして、一生懸命授業に参加しています。

ご存じの様に、授業のICT化を本校では推進しています。考えの共有や、学習コンテンツの活用など、様々な場面で端末を利用した授業を行っています。ご家庭でも、スマートフォンやタブレットを日常的に使っているお子さんは多いのではないのでしょうか。ICTの活用が進むほど、これまでになかった問題が出てきます。以前であればメールのやり取り、最近ではLINEのやり取り、通信を用いた家庭用ゲーム内でのチャット、SNSでの発信、等々枚挙にいとまがありません。

こうしたICT関係の問題の根っこにあるのは、相手意識をどれだけもっているかどうかということ、そしてアンガーマネジメントがどれだけできているかということがあります。大人でもトラブルが起きるわけですから、子ども同士でトラブルが起きないわけがありません。朝の放送で児童に話したことです。不特定多数の人が見るところに、例え悪口が書いていなかったとしても、自分の名前が書かれていれば気持ちの良いものではありません。まして、悪口が書かれていたり、縁起でもない言葉が書かれていたりしたらいやな思いをしてしまいます。通信を使ったゲームのチャットでは、うまくいかなかった気持ちを言葉にしてみたり、相手を罵るなど自分のその時の感情を相手にぶついたりすることもあります。こうしたことは、大人になっていく過程で様々な経験を経て少なくなっていくと思います。しかし、だからと言って「子どもだからしかたがない」と考えてしまえば、児童にとって、それがいけないことであることを認識できないこともあります。大人は「子どもだからあり得ること」と理解しつつも、「駄目なものは駄目」というきちんとした価値観で指導していくことは大切なことだと思います。

今、いじめに対する概念は、以前と大きく変わっています。以前は継続性や悪意などの存在により判断していましたが、現在は相手が不快な思いをすれば、それはいじめとなります。児童同士でのトラブルは、どちらが先に手を出したという単純なことだけではなく、その前にあった様々なことから複合的に起こります。ですから、そのときのことをよく聞き取り、客観的な事実をもとに児童に考えさせ、自分の良くなかったところについて振り返ることができるように指導しています。

先日、本校では防犯サイバー教室を行いました。これからも継続的に、児童が被害者にも加害者にもならないように、指導を進めてまいります。保護者の皆様方におかれましては、より一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。